

【優秀賞】

最後の一着

遠藤和代・香川県

令和元年を迎えた五月、わたしは七十歳になつた。まだまだ若いつもりだつたが、急に人生の終焉が射程距離に入つて來たようで、何となく心がざわつく。

世の中は断捨離ブームだというのに、わたしの荷物は増えるばかりだ。ブームにのつかりわたしもそろそろ身軽になつて、人生を謳歌するのも悪くない。荷物が減れば、わたしがこの世を去つた後、子供たちへの負担も少し軽くしてあげられる。

そんな思いを夫に告げると、

「死んだら何も分からんで。後のことなんか考えてもなるようにならん。でもまあ、あんたの古着だけは、始末しといたほうがいいかもしない」

最後にひと言、わたしへの批判をするのは、いつものとおりだ。

夫に相談なんかしなければよかつた、と心の中で毒づきながらも、洋服タンスや押し入れの中を点検した。何年も開けたことがない衣装ケースの蓋を開けると、思い出が詰まつた服が次々出て来て、しばらく前に進めない。頭の中で、思い出がメリーゴーランドのように回る。

自分のスタイルが悪くて、既製服を買うのに苦労していた母は、五十を過ぎて洋裁学校へ行つた。そのころ縫つてくれたえんじ色のワンピースが出てきた。当時、外国航路の船員をしていた夫に会いに行くために縫つてくれたものだ。似合つているよ、という夫の言葉を期待していたのに、男ばかりの船には、ふさわしくない服だと窘められた。がつかりしたわたしはP.T.A参観に着て行つてみた。

小学生だった長女が、お母さんの服とつてもきれい、と友だちが言つていたよ、と報告してくれた。

せっかく洋裁学校へ行つた母だが、わが家の女三人の衣装作りに追われて、自分の服どころではない。そう嘆きながらも、母は着てもらえるのが嬉しかつたのか、流行の服を次々縫つてくれた。パンタロンスースや襟が高くて体にぴつたりのシャツ、子供たちのジャンパー、スカート、通学用の袋など沢山縫つてわが家の家計を助けてくれた。わたしの服も夫好みの茶色や紺色などに変えてくれた。

引っ越すときに捨てたのか、母が縫つてくれた服で残つているのは、えんじ色のワンピースだけになつていた。他の服は写真ブックに残つてあるからいいか。

このワンピースだけが、どうして残つたのか。ジョーゼットの高価な生地だったのと、わたし好みの色だったからに違ひない。縫つてくれた母は、十年前に他界したが、ワンピース

の色はいまも褪せてなくて、手を通したくなるほどだ。太ってしまった体にはもう無理だけど。洋裁学校の先生から買ったが、縫いにくくて難儀する、と母はぼやきながら、仮縫いをしてくれた。ときどきあたる母の手は暖かかった。

母さん、あなたが縫ってくれた服はもうこれ一着になってしまったけれど、捨ててもいいかな。

一着広げる」とに過ぎて行つた時間を手繕り寄せていたのでは、なかなか前に進まない。古着で足の踏み場もない部屋の中で、立ち往生していると、夫が覗きに来た。

「思い切つて捨てな、きりがないで」

コーヒーとともに嫌味も置いて出て行つた。

わたしの人生を飾つてくれた服たちに、さようならをするにはそれなりの儀式がいる。留守家族をまもつて一生懸命生きた証なのに、夫には理解してもらえない。

古着の整理は三日あまりかかった。再利用できそうな服を残して、ゴミ袋に詰めていく。えんじ色のワンピースも思い切つて詰め込んだ。五箱あつた衣装ケースは二箱になつた。やつと捨てる決心ができる、ホツとしていたら、ゴミ袋を取りに来た夫に、「これだけ」と不満そうに言われた。

最後の夜は、疲れきつた。いつもより一時間早くベッドに入つたが、二時間後には目覚めてしまつた。何とかして寝付こうと、右に左に寝返りを打つてみたが、やはり眠れない。明け方、ついにええい、と起き出した。隣室で寝ている夫を起さないよう、そうと階下へ下りて行く。車庫の中に積み上がつてゐるゴミ袋の中から、えんじ色のワンピースを取り出す。かなり底になつていたが、何とか取り出せた。朝の早い夫に見付けられないように、ワンピースを抱えて寝室へ戻つた。

ハンガーにつるしてわたしは考える。たぶんウエストを広げて、脇を少し出せば、まだ何とか着られるのではないか。少し派手かもしれないが、自分が恥ずかしくなければそれでいい。

そうだ、図書館にサイズ直しの本があつたな。開館したらさつそく借りに行こう。安心したわたしは、再びベッドに入つて、今度はぐつすり眠つた。